

イメージする楽しみ

1994年(平成6年)8月11日 講演

舞踊家 野々村 明子 (307)



野々村明子講師紹介＝堀澤勢津子さん

野々村さんとは中学1年のときから高校とご一緒に、彼女は中学校で体操部に所属、そのころからしなやかな肢体で、しなやかな体操をしていました。そのころはモダンダンスはしておられなかったが、持って生まれた才能があり、高校2年のときに奥田敏子先生のモダンダンスの舞踊研究所に入られた。それからメキメキ上達されまして1975年昭和50年に自作の”空気が渴く”でデビュー、6年後の1981年にご自身のスタジオでダンス・スペースを始められた。1983年現代舞踊家協会「奨励賞」を受賞。1984年名古屋市芸術奨励賞受賞される。1986年ダンス・スペースシムナジュウムを設立、主宰。1987年昭和61年芸術選奨・文部大臣新人賞受賞。1992年世界バレエ・モダンダンスコンクール特別賞を受賞。海外では中国、欧州、アメリカなどで公演をなさっています。

狂ったような激しい夏が私達の日常をかけぬけて、先祖の霊たちがそれぞれの家族のもとに訪れるお盆が目の前の8月11日、私は旭丘とかかわる不思議な集いに講師として招かれたのでした。

朝から妙に落ち着かなく、それでもお芝居の振付の仕事があつて、昭和区役所講堂で”夏の夜の夢”に取り組む若い人々の相談にのり”芥子の種””蜘蛛の糸”とかの動きを考えたり、ウチワに葉っぱをつけてカン高い声をあげる妖精たちの振付をして、人間たちとは次元の違う雰囲気作りを手伝っていました。

妖精になる一人の女の子がこの暑いのに大きなマスクをして、部屋の中なのにサングラスをはめ、長袖でじっとうづくまっていますので、どうしたのかと聞くと、妖精の森づくりの葉っぱをとって、ウルシの葉でかぶれたのだと・・・可愛相に見事にまっ赤にはれた顔の彼女に、自然がちょっぴりこわがらせたのも、妖精に扮する要素になるかなと思ったのでしたが・・・

何年前だったか、白川郷の合掌作りの村里へ踊りにいった時、沼のほとりで踊るのだと、人に話すと、「マムシがでるわよ」と驚かされて、内心こわくて本番まで不安でたまらなく、出かける時は、こっそりとカバンの中に保険証なんか入れて、準備したことを思い出

しました。その時は、冷たい雨がイヤというほど降って、沼地はドロドロだったのですが、冷んやりしたのでマムシは出てこなかったのですが・・・

そう私にとってこの白川郷との出会いは、忘れられない思い出をいっぱい作り、教えられる事がいっぱい、生涯忘れられない村です。はじめてこの土地を教えてもらったのが、フルート奏者の真野利郎さん。「音楽好きのお友達から、フランス帰りのかわったフルート奏者がいるから、一度聴きにいかないか」と誘われて、聴いてびっくり、フルートを演奏しているというよりは尺八のような感じで、私の既成概念をこっぴみじんに打ち砕き、正直その時は、感動というより不思議な時間だなあーと思ったのでした。

それからバタバタと彼と一緒に創造の時間を持つこととなり、その一年後に白川までついて行って踊ったのでした。もう一人パーカッションの横山さんと一緒に三人で白川の合掌作りの里で、8月の二夜を公演しました。その第一日目は、音楽だけの予定で私は一聴衆として、合掌作りの建ち並ぶ緑と空にすっぽり囲まれた里で夕暮れの押し寄せた景色を見ながらのんびりした中にいました。

しかし音楽が回りの自然と妙にじっくり木霊しは

じめると、私の中の得体の知れぬざわめきが、波のようにはじめ「踊らなければ」と首をもたげはじめました。衣装をこっそり人に頼んで宿にとりにってもらい、草むらで薄い白い布のコスチュームに着替えて、手にこっそり持っていった紙吹雪を、パラパラと観客の人々の中に散りばめたときです。何のなせる業か、あたりに急に風の気配を感じたのです。そう、私の散らしはじめた紙吹雪が風によって舞うではありませんか。それまでは全くの無風だったのです。あれよあれよと思っているうちに、風と私と紙吹雪、そして、自然の中に融け込んでしまった音楽、すべてがひとつの時を奏ではじめたのです。ゾクゾクする一体感の中、私は踊っていました。

すると私のおでこにポツリ、肩にポツリ、何と雨が降って来たのです。雨だと思ふゆとりすらなくらいに、ザーッと激しい闇の夕立にみまわれたのです。それまでゴザを土の上にひいて観ていた人々は急にざわめきはじめ、傘を探し、雨やどりの屋根を探し、音楽家の人達は、楽器がぬれないように気を配り、一瞬、どうなることかと思いました。幸い、芸能堂がすぐそばにあり、係の人がその板戸をガタガタ開けて、皆んなはその屋根の下にすわり、楽器に傘がさしてもらえ、パフォーマンスは、続けられました。

もちろんその間私は、ドシャ降りの雨の中、全身に水を感じ、心の中でこの雨は、私がこの土地で初めて踊ることへの、お清めだ、そう思っていました。だから雨をそのまま受けねばと思ひ、ただひたすら踊りました。雨の中のパフォーマンス闇の深まりと共にもう終演間近か、私は存在をこの緑の中に消したくて、こんもりした茂みの中に踊りをおえてじっとしゃがみました。

その時です。わずか一個の裸の電球が私の茂みを照らしました。その時です。私の静止した身体の中から、ユラユラと立ち昇っていく白いあたたかい炎のような湯気、水蒸気の蒸発していく煙のような、この美しい景色を、私は体中に刻みたいと思いました。観ていた人々からも何度も何度も、この時の情景が話題にの

ぼりました。

当り前のことだったのだと思います。でも私たち、その当り前の事に案外驚かないのではないのでしょうか。そして、踊りおわってびしょぬれの身体をバスタオルでふきながら白川の人びとと、名古屋から車でかけつけてくれた人々と、この夜の出会いに話はずませながら、宿にもどろうと外に出た時です。さっきの雨とは正反対の星、星、星。それも満天の星空から私の頭上にひろがっていたのです。思わず「ウアーツすごい！！」と叫んでしまいました。雨にうたれてちょっと疲れはしましたが、快い満足感でした。

一夜あけて、次の日が私の本番だったのです。昨夜の雨で、いつ雨が降り出すか分からないことを想定して、踊る場を外、そして観客の皆さんを、先程、板戸を開けたといった芸能堂にしました。一緒にいった照明家の人も相談し、自然をそのまま、受け入れた場づくりでいこうと、準備しました。前日の雨の教訓で、私たちはひとつ利口になったように感じました。都会では味わえない、この草の匂い、夕立の激しき、全くの闇、満天の星・・・自然は、私たちの決して自由に出来ないものであって、私たちも自然の一部であるのだ。その事をしかと体中にたたきこまれたのが、この白川郷だったのです。

その後も沼のほとりへ踊りにいったりしましたがけれど、やっぱりいつも、本番前、雷雨にみまわれました。私は、雨の中を本番を待ち、その音の厳しい中に妙に落ち着いていく自分を感じたものでした。それは、人間がどんなにあがいても自然は、降りただけ降りし、晴れたただけ晴れて、私たちは、そんな自然の自由さにあわてて笑われてしまうぞ・・・知恵を働かせて、その中でどうすればいいかを考えるのだ！と、私は踊りをつくる時、いつもこの調子でつくるようになりました。

この白川郷の出会いから、私は二つの作品を考え付いたのです。「恋する天体」という作品と「野はらよりの手紙」。どちらも、自然をテーマにし、自然の一部として生きていきたい自分自身の生き方のテーマ

がみつかった私の心の故郷・・・それが白川郷だったので。

ずい分前置きが長くなってしまいました。「イメージを楽しむ」という題の私の講演内容を書くように頼まれたのに・・・。私同じことを二度出来ない悪い癖がありまして、ほぼ 11 日の内容を多分再現できません。

あの日の感想を書かせていただこうと思います。

○

私、やっぱりとても落ち着きませんでした。何故かって、今までもいろいろな所でお話しさせていただく機会があったのですが、ほぼ年代とか、趣味とか、ジャンルとかが統一されていて、この日ほど、集まれる方がどんな方なのかよく分からず統一されている事といえば、”旭丘”ということだけ、”旭丘”から何をイメージ出来るかと思ったのでした。

私の旭丘時代、断片的な思い出は、”体操部””受験””男女交際””交換日記””アッセンブリー””ファイヤーストーム””フォーク・ダンス” etc.。中でも一番心に強く残っている思い出は”初恋”かな？そしてもうひとつこの旭丘時代に、今のダンス（現代舞踊）とめぐり会ったことです。受験に突入する時、ダンスと出会いました。

それは多分、人間ってギリギリのところに来ると、それまで、モヤモヤと心の中でくすぶっていた迷いに、決断を余儀なくされる。もし、あの時、受験だけに走っていたら、今こうして踊っていないだろうなあーと思うと、何だか時々不思議なめぐり合せを感じます。何でもスタートする時は、こわいし、不安でいっぱい、でもこわがっては何もはじまらないし、17歳は遅いスタートだったけど、私にとっては、それバネになったような気がします。だから今私はダンスで 30 歳なのだ。

私の話を聞いて下さる方々は、どの方も皆、私に手を差しのべるように「イメージを楽しむ」なんてどうやって話したらいいのか、当の私にすら分かってないのだから。あたってください、くだけてしまえばそれ

だけの自分、自分がどこまで、皆さんの心の中に語りかけられるか、そして皆さんがどんなイメージを私に抱いて帰って下さるか・・・。私の話す時が刻々と近づいて、私は出された食事もうわの空・・・。

さあ、私の出番、まるで舞台が始まる時のように一瞬、空気を吸いこんで、小さな傘を持って、本当は踊ろうと思っていたのですが、カセットデッキがなさそうだし、水不足の日本列島だから、どなたかと雨にかかわる歌を一緒にうたって、童心にかえていただこう・・・そう思いました。私の DANCE も、SPACE がそうのようにただ聞いて下さるだけではダメ。何がしかの形で参加する。私が舞台上で踊るよりも、外で踊る方が好きなのは、そうした生の観客の風を感じさせてもらえるから・・・。

この日も、私にひっぱり出されて、歌をうたって下さった方、体を動かして下さった方、仕事がおわってビールのもので、お食事していい気分がコックリしていた方、ごめんなさい。私こうして皆様と出会って、話しながら一緒に体を動かし、一緒にひとつの事を楽しむことが、人と人の心をつなぐものだと思うからです。

私のダンスを観に来て下さった多くの方は、元気が出るとおっしゃいます。毎日を明日から、もっと大事にしようとも、白川郷の話もしました。そして、もうひとつ中田島の砂丘で踊った話もしました。砂丘は、あまりの大きさと起伏の大きさと、すっかり疲れましたが、それまで舞台上で踊っていた、思いあがりやをペチャンコにくだかれ、それこそまさに、自然の一部にしかない私達の存在、を教えられた思いでした。そしてもうひとつ、夕暮れの一瞬のシルエットのような私達の身体の美しさ、ただ在るというだけでも絵になる砂丘のパフォーマンス・・・今とても懐かしく思い出されます。

はじめの方に書いた白川での水の話。私、水が好きなようで、昔旭丘時代の水泳大会で、泳げもしないのに、ただとびこんで、潜水泳法でなら何とかなだけで、女子の少い（一クラス 60 人中 10 人）ハンディーのため、リレーのメンバーで出場してしまった時の

事……。案の条、途中で、息が苦しくなり「えいっ立って息をすればいい」と立ったのですが、ご存知のように旭のプールは深く、私は見事にアップアップ。あわてて、底まで行って足で蹴って再び泳ぐことになりました。あー男子学生にあれ程頼んでおいたのに、誰一れも助けには来てくれませんでした。やっぱり自分でやるしかない。そんな苦い体験も、私と水との何かのつながりのようで……。

昨年の12月、とっても寒い冬日、碧南に住む不思議な魅力的、情熱的グループから頼まれて、碧南市に新しく出来たシアターサウスという劇場に踊りにいった時も、外景の中でオープニングをしたのですが、外燈にうかぶ美しい噴水のある池に、踊りながら私は誘いこまれ、気がついたら、水の中に横たわり、全身ずぶ濡れ。

踊ってる時は全く感じなかったのですが、終わって楽屋でびしょびしょの衣装をぬいだ瞬間の震え、歯も肩も腕もガタガタともう震えがとまらないのです。皆で全身をさすってもらうこと30分、ようやく落ち着いて、舞台での本番にむかいました。久々に、身の震えを体験しました。外で観ていただいた方々ももっとも寒かったでしょうに、でも冷たいあとの体のぬくもりは、その後の本番へのエネルギーともなり、また観て下さった方にも大きな感動の延長になり、拍手の鳴り止まぬ、すばらしい一夜の出会いでした。

このところ、名古屋を遠く離れぬ近郊で踊るチャンスが多く、昨年の夏は、津島の天王川の上で「ゆめまんだら」という作品を上演しました。私、やっぱり水にかかわりが強く、この日も本番前、台風の余波の雨がザーッと降り、どうなることかと思いましたが、雨は止み、川面に照明美しく、向う岸を走る車のライトが蛍のように流れ、なかなか味のある一夜をもてまし

た。そして、私泳げもしないのに、ちょっと藻でできない天王川へ作品のラストにとびこみました。なぜって、その土地にゆけば、その土地の風に精神を捧げねば、踊ってはならない、そう思ったからです。やっぱりよほど、水と深いつながりをもつ身のように、初恋の人とめぐり会った作品「虹のかけ橋」でも、ラストは舞台上からシャワーを浴びたのでした。

こんな私のダンスイメージーションをかきたてるのは、毎日の生活、出会う人々。心の中にかぶる風景、17歳ではじめたダンスです。人より遅く開花して、30歳を過ぎて足が高く上がるようになり、40歳を過ぎて体が自由に動くようになった。さあ次は50歳にむかって、人間の右脳は、創造するイメージの脳、こちらは左脳と違って老化しないというから、自信をもって、体力づくりをおこたらず、童心を忘れず、体はいつも息を大きく深く吸って、たくさんはいて、新鮮度を失わず、少女、少年、女性たち、男性たち、そして年老いた方々とも、手に手をとってシェイクアップダンス、頭の中も、時にはシェイクして、人生、楽しく過ごすこと。

私、宣伝になりますが、同世代のとっても仲の良い、通じ合えるダンス仲間と、今年の12月27日に、名古屋市の芸術創造センターで、「帰ってきた三人の婆婆」というのをいたします。ぜひ、ぜひ、皆様、たくさん観に来て下さいませ。音楽でOHAYASHIを担当してくれるのが私の少し後輩の作曲家「大野栄潤さん」旭丘って以外に、皆さん変った方が多いのです。心強く、この旭丘の気風を今も、応援しつつ、私のつたない講演をお聞きにいらして下さいました方々へ深くお礼申しあげます。皆様ありがとうございました。一日に一度は体をシェイクして下さいね。息をはきながら……。